

私の投稿句の背景（令和七年一月例会）

（投稿句）身勝手や賀状を断ちて淋しがる

## たった一枚の年賀状

北 洋 一

今もって、毎年「たった一枚の年賀状」が私に届く。

永らく勤めた職を退くにあたり、私たち夫婦は子供たちが住まいしている大都会の直ぐ近くに終の棲家を構えることにした。

私は、退職後の所謂第二の人生を、第一の人生に縛られないフリーなものにして新しく生きてみたいという思いを前々から強く持っていた。いや半分は遊び心からである。

（この稿の背景にはいつも遊び心があることを断っておきたい。皆さんにも遊び心を持って読んでもらえれば有難い）

定めた街は故郷から遥かに遠く、また勤めていた会社とも全く縁のない處なので、かねての思いを実現できるはずだと意を強くして、手筈を周到に整えることにした。

フリーに第二の人生を構築するポイントは、第一の人生の中で次々できてしまっている多くの人たちとの関わり合いから先ずはフリーになることにある。どうしたら、その人たちの中からすっぱりと抜け出せるかということである。この「すっぱり」が遊び心的には肝要なのである。

それまでの勤め人生活の残影と融通無碍に付き合いながら第二の人生

を実現すればよいではないか、きつと皆さんはそう言われるであろう。私には何しろ、中途半端を嫌うところがある。中途半端は、必ず綻びがあるのである。知っているからである。事を為すのであれば須らく一氣にである。それが「私の美学、いや遊び心」というものなのである。

例えとしてどうかとも思うが、私は若いころ喫煙者であった。日々ピース三箱を空にしていた。身体に良くないことは解っているのに、本数を減らせない。節煙すると決意して始めても、本数は直ぐに元に戻る。戻るといふより、その前よりも、よりヘビースモーカーになる。節煙、減煙等と言う中途半端は駄目なのである。

そのことに気付いた私は一気に禁煙、いや断煙に踏み切った。（禁煙という語よりも、意志が垣間見られる断煙の方が、私的には好きである）ポケットに「味塩」の小瓶を忍ばせておき、禁断症状が起こるたびに口に振り込んで苦しみを紛らわせた。（味塩による断煙方法」の特許は未だ出願していない）

成功したのである。成功してみると、あの禁断症状の苦しみが今度は懐かしいというか、あの苦しみの中に自分を置いてみたくなるという、不思議な感情が出現した。私にはどうもマゾ的な体質が潜んでいるのかもしれない。

話を元に戻そう。

すっぱりと抜けだすと言っても、「退職の報告と厚誼への礼状」を、どのようにするか。一切出さないという不義理はいくら何でもそれはできない。しかし、出せば、わざわざ転居地を知らせるようなものである。

結論から先に言えば、「近々退職の運びとなったことのお知らせと永のご厚誼へのお礼」という形式で、最後の勤務地に未だ居る内に、葉書を出したのである。退職後についてはこれからであることをそれとなく匂わせておくことで、私の第二の人生の予定地を知らせずに、知られずに、義理を果たしたのである。

会社に提出した「今後の連絡先」欄には勿論「未定」と記入したし、それまで使っていた携帯電話は会社からの貸与品だったので、データを消して返却した。固定電話契約は、転居にあたって一旦解消した。

こうして私は、痕を残さぬよう細心の注意を払って最後の勤務地から消えた。「すっぱり」と先ずは抜け出したのである。

後になって気付いたのだが、退職にあたっての転居費用は会社が負担していたので、運送会社の請求書の線を辿れば転居先は解かるはずである。しかし、そこまで追跡したことを伺わせるようなことは何も起こらなかった。妻は、私のような遊び心は持っていないので、友人たちとはそれなりの連絡を取りながらの転居となったが、彼女の人的ネットワークは私とは被さっていなかったので、私に綻びが出ることは無かった。

かくして居を移した私は、散歩コースの途中の原っぱで見かけた「紙グライダー飛行」を楽しむグループに入れてもらったり、周五郎のゆかりの地であることから名付けられたという「べか舟句会」へ七十の手習いで入会するなど、あれこれの集いに参加して気儘に暮らし始めた。私はどんな会に入っても、その場限りの付き合いに徹することを第一とした。これまでの人たちからフリーになろうというのに、それを繰り返す

手は無いのである。

カタパルト（ゴム紐）を引いて二十階建てのマンションぐらいの高さへ紙グライダーを打ち上げるのは直ぐにできるようになるが、直ぐに落下する。この紙グライダーが青空を悠々と旋回してくれば、それを見上げている間、私は癒され続けるのである。誰の打ちあげた機（紙グライダー）であろうと癒されるのである。ここがこの遊びの味噌である。勿論、自分の機であれば猶更であるが、唯々この癒しに浸るという、それだけが楽しみで遊ぶのである。これが飽きないのである。

雨で無く、風の強すぎない日ならば週三回、午前中の二時間ほどを遊ぶ。もう十年を超える。昼前、定時に帰宅すると、傷んだ飛行機の替りを作って次に備える。健康維持というくらいのメリットはあるが、よくもまあと自分でも不思議に思う。勿論、仲間が居てのことである。

いそいそと定時に出かける私を見て、妻は「会社員の時と変わらないわね」と言う。そうは言っても、常連の誰彼を連れての夜更けの屢々の酩酊帰宅等はないのだから大違いである。

メンバーの誰とも、原っぱの外での付き合いは無い。誰がどこに住んでいるかなど私は知らない。

私は若い頃に、ガリ刷りではあったが、詩の同人誌を出していた会のメンバーだったこともあり、この街に来て直ぐに「詩の同好会」を探したが見つけれなかった。俳句は初めてであったが、その街に縁のある小説に魅かれて「べか舟俳句会」へ入れてもらったことは既に書いた。

自由律の詩と違って、「季語」という型に縛られ、その「詠み方」もある意味お稽古ごとの縛られており、この縛られて作句をするという苛

々した苦しみが、実は断煙をした時のあの禁断症状に似ている。だから私は、私の俳句を勝手に「断煙俳句」と呼んでいる。

与えられた兼題を前に、癩癩を起しながら悪戦苦闘をするという禁断症状紛いが、実は私を、マゾ的に「べか舟句会」につないでくれているように思える。句会の席上でも、禁断症状紛いがしばしば出て、先生や会員の颯颯をかう。そんな「断煙俳句」だから、出来上がるものが小理屈俳句の域を抜け出ることは何時まで経っても無い。

作句していて、「もつと自由に創りたいのに」という禁断症状紛いが高まると、断煙時に「味塩」を、口に放り込んでいたように、地方紙に「味塩短詩」を投稿してみたりもするが、若いころのような感性は最早錆びついていて、これはまたこれで、「断煙俳句」と同じような症状を起こすという為体で、遊び心も挫けるというものである。

俳句会の人たちとも句会の場合限りであり、その意思が無いからでもあるが名前を覚えきれない。

余談ながら、会の世話人はいても主宰という風な権威者ではなく、一人一人が一国一城の主であった、あの喧々諤々の、若き日の「詩の同人誌」の例会が懐かしまれる。女性の詩人たちも言葉を弛めない。私も、自称達治や自称朔太郎に食ってかかって負けてはいなかった。それが許される会であった。会が退けた後の二次会がまた楽しかった。涙ぐむ人、鼓舞する人、夢を語る人、法螺を吹く人。これ以上はもう言うまい。為る方ないことである。時代の違いなのか、構成員の年齢の違いなのか、自由律と定型律のサークルの違いなのか、私には判らないが淋しい。

転居した年の十二月が来た。

年賀状の時期である。前年までのような煩わしさから解放されるのでルンルン気分になれると思っていたのに、一切断つかどうか、もう一度整理せねばならないという大仕事が待っていた。

八割方は仕事上の義理の年賀状だったので、これはまあ断つことに未練はない。残りの二割をどうするか。親族関係はそれまでも妻に任せていたので心配はいらない。しかし、永いサラリーマン生活の中で出来たそれなりに濃い付き合いをした魅力のある人たちが結構いる。だからと言って、これを許していたのでは「千丈の堤も蟻の一穴から」である。

そうこうしながら、絞りに絞って行った先に残ったのが、高校二年の時の同級生三人である。五十有余年来の友人である。

私を含めた四人は、自由奔放に振る舞える少年期がもうすぐ終わるのだという不安があつてのことであろう、いつも連んでいた。

たまたま教室での席が前後左右に並んだというだけで始まった仲間意識であるが、その高校の裏手の丘の上にあった教会に「神様はどこにおられるのか見せてほしい」と、ヨーロッパから来ていて未だ日本語に苦勞されていた神父を、罰当たりにも揶揄に行つたのが皮切りだった。

それぞれにいた同じ街のミッシヨン系の女学生へ、思いを告白しようと、ガリ版刷りの同人誌を作り、その中に恋心を吐露する作品をそれぞれ載せて送ったりもした。直ぐに相手の母親たちから校長あてに厳重な抗議文と共にそのガリ刷りは送り返されてきたが、校長は「桃色じみたことはするな」と叱りながらも「今のうちだぞ」と元気づけてくれた。

夏山登山で、夕ぐれの山頂付近に浮遊するユーホーを視認し、下山して直ぐに「未確認物体研究会」を立ち上げた。ベタ記事ながら、全国紙の社会面に「各地で未確認物体目視の報」が載っていたのだから満更与太ったものでもない。尤も、他の参加者がいなかったのだから直ぐに解散したが、あの未確認物体の存在を超自然的なオカルトの世界と結び付けて固く信じ、四人共その後を生きたのは間違いないことである。

その頃、安保闘争はもう終焉に向かっていたが例の「怒れる十七歳」の言葉が、日本全国を走り、軽挙妄動が売りの四人の上にも襲ってきた。

その街の大学で助手をしている先輩を知っていた一人が、頼み込んで「多喜二研究」というタイトルで、放課後に教室で四、五十分ほどの話しをもらった。参加者は、我々の他には十人もいなかったが、無許可で校外者を招いたということで、父兄呼び出しの上で生活指導主事到大目玉を食らった。が、誰も本当の父兄を連れて来てはいなかった。その先輩に、ゼミの学生を父兄として調達してもらったのだ。笑いを堪えながら、生活指導主事の先生の大目玉を聞くのに苦労した。

説教が済んだ後、臨時の父兄になってもらった兄、姉達に連れられて喫茶店に入り、九人で大笑いをした。勿論そのことはバレバレであったのだが、クラス担任が校長に話して「まあまあ」と押さえてもらっていたのである。古き佳き時代のことではあったが、悪いことをしたものである。とにかくバカ騒ぎを、次々に考えては即実行して、あの少年と青年の端境期の漠然とした不安から逃げようとしていたように思われてならない。

そうした時代を共に過ごした四人、その後の道はそれぞれ違ったが、以後、欠かすことなく年賀状だけは交換を続けた。

と言うのも、あの年に賀状の交換を始めるにあたって「死ぬまで続けよう」と血判状ならぬ指紋状を交わしたのである。まさにあの成長期特有のセンチメントでしかないのだが、大真面目だったのは間違いない。

私は、結局、賀状を一切、あの指紋状を交わした三人にも出さないとにした。「すつぽり」と抜け出した第一の人生の中には、我ら四人のあの佳き時代は入らないのに。いやいやそんなことを言い出したらきりが無い。中途半端は、我が辞書には無いのである。

年が明けて、一通の賀状も来なかった。いや、届かなかったというのが正しい。旧住所に賀状を出してくれていた方々には真にもって申し訳ないことをしてしまった。罵倒されても一言も無い。

他の人からはともかく、二人の友から（あの仲間の内の一人はその五年ほど前に他界していた）賀状が来なかったのは、予想をしていたものを遥かに上回る淋しみであった。何せ、五十有余年、毎年、びっしりと近況報告を書いて交わし合っていた賀状である。断煙時のあの禁断症状の苦しみよりも、もっともつと強い、淋しみだった。

私のような全くの身勝手な理由は別にしても、それぞれに理由があつて賀状交換を止められた方々にとつても、いつも来ていた一句入りや、水彩画入りなど、楽しみにしていた人からの賀状が来なくなった時の淋しみも同じではないだろうか。

## 身勝手や賀状を断ちて淋しがる

二月半ばになって、春一番が吹いた日の翌未明に弘永が訪ねてきた。別に何かの用件で来たという風でもなく、気が付くと、玄関先で手を振って去って行った。弘永というのは、まさにあの四人の仲間内の一人である。どうしたのであるうか、弘永のことは気になってはいたものの、私に野暮用が重なったこともあつて取り忘れていた。

それからひと月ほど経ったであろうか、弘永の葬式への「会葬御礼」なる葉書が時機を失して届いた。それを見ると、広永は、あの春一番が吹いたまさにその日に、地元で亡くなっていた。

印刷されていた「会葬礼状」には、喪主である広永の奥様の名前の末尾に手書きで園田の名前が書いてあった。園田はもう一人の仲間であるが、彼が私の住所を知っている筈もないのに、どうして葉書が届いたのだろうか。弘永が、あの春一番が吹いた日の翌未明に私を訪ねて来たということよりも、会葬礼状が届いたことの方が、私には不思議でならなかった。というのも、あの未確認物体研究会以来、私はオカルト的な事象はありうると信じて生きて来ていたからである。

二、三ヶ月ほど、暇を見つけてはあれこれ考えていて、ようやく私に一つの推理ができ上がった。それはこうである。

私の投稿句がビギナーズブラックで、全国紙の「俳壇」の選者兜太先生に採ってもらったことがあり、作者名と居住市名がその新聞に掲載されたのを彼は目にしていたか、あるいは誰かから教えられていたのではな

かるうか。彼は、広永の死を私に伝えようとして、その新聞社に私の住所を尋ねる電話をしたものの、にべも無くこれは拒絶されたであろう。

私は推理を続けた。

園田は、広永の葬儀に参列した時にもらった宛名書きのされていない「会葬御礼」の葉書に切手を貼って、「北洋一宛に送ってほしい。自分には彼の住所は教えてもらわなくて結構です」というメモ共々その新聞社に送ったに違いない。園田のことであるから、その新聞社の「購読料金領収書」を一年分ほど同封して、自分が愛読者であることを恩着せがましく伝えるぐらいのことはしたであろう。届いたあの葉書の消印が故郷のものでは無く、東京中央郵便局であつたのはこれで合点できる。

推理が出来上がった私は、縁を断つことにしていた自分の決断を破ることはなるが、翌日にでも園田に遠距離電話をして確かめてみたいという強い誘惑に駆られながら床に就いた。

すると、翌未明、園田が訪ねて来て、そそくさと玄関で手を振って帰って行った。

私の推理が正しかったのかどうか、今となつては確かめようがない。

指紋状の約束を一度破った私は、そのことが心に残り、その年以来、もはや自分宛にしか出せなくなった年賀状を毎年出して、四人の誓いを固く守っている。逝く年まで守るつもりである。

今もって、毎年私に届く「たった一枚の年賀状」が、それである。

(2025.1.31)